



富山市教育センターだより
第37号
平成29年7月24日
富山市八人町5-17
TEL 076-431-4404
<http://www.tym.ed.jp/c10>

- 学校教育課発
- 教育センター発
- 初任・新規採用教職員紹介
- 学校・園紹介

(題字「道」明瀬 正則)

「主体的・対話的で深い学びの実現」

富山市教育委員会教育長 宮口 克志

小・中学校の新しい学習指導要領には、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」というフレーズが幾度となく使われています。「主体的に学ぶ子どもの育成」は、私が教員になる以前から大切にされてきたことであり、教育における不易です。それが未だにキャッチフレーズとして取り上げられるということは、教育における永遠のテーマであると同時に、その実現は容易なことではないということの表れともいえます。

そこで、学校訪問等で授業をみていると、ちょっと気になることがあります。教師の発問に対して、子どもたちは思考を巡らし、考えを発表しますが、それに対する教師の対応なのです。

A: 「なるほど、いい考えだね」と評価し板書する。

B: 「なるほど。ほかにないかな」と相槌は打つものの、他の話題に切り替える。

C: 「先生が聞いているのは、〇〇についてだよ」と問いの意図を再度説明する。など

推察するに、Aは教師の想定どおりの答えであり、BやCは教師の想定にはなかったものなのでしょう。

ここで疑問が。教師の意図しない発言は子どもに問題があるのかということです。そして、正しくてよい評価をAだけが受け、BやCはぞんざいに扱われたり否定されたりしてよいのだろうか。それらはいずれも教師が発した同じ問いに対して、子どもたちが精一杯考えて答えた意見なのに・・・。

教師の問いが曖昧だったために、子どもがそれに答えられなかったのかもしれませんが。また、多様な答え方があるにもかかわらず、教師が「答えはこれ

と決めつけていたために、子どもの考えを柔軟に受け止めることができなかつたとも考えられます。だとしたら、教師の方にこそ課題があるのであって、そのことを真摯に受け止めたうえで、「子どもの実情に応じた発問を心がける」、「子どもの発言の可能性を見だし発展へと導く手助けをする」など、対応の改善を図らなければならないはずです。

変化の激しい先が見えない時代にあつては、様々な課題の対応には「この方法しかない」といった「正解」は無く、立場や価値観の異なる相手との対話を通して、みんなが了解できる「納得解」を見だし、状況の変化に応じてそれを修正していく柔軟な対応力が求められます。ところが、前述のようなことが日々繰り返されることで、子どもの目的が、教師が求めている「一つの正解」を探ることにシフトし、自由で多様な発想が生み出されなくなるとしたら大きな問題です。

気になることの一例を示しましたが、学習指導要領改訂という節目の今こそ、教育の原点に立ち返って教育の在り方を考えてみるべきです。そして、先生方一人ひとりが日々授業の改善を心がけ、授業の記録を録って見返すことで、新たな課題を見つけて更なる授業改善に生かすという、地道な実践の積み重ねが必要だと考えています。日々の営みで見える進歩は実感できなくとも、継続し蓄積することで必ずや大きな力が身につきます。

「主体的・対話的で深い学び」は子どもに求めるばかりではなく、教師に求められる資質でもあると思います。そんな教師の学ぶ姿勢こそが子どもたちに大きな影響を及ぼすに違いありません。